

パレーシア：「自由に語ること」

パレーシア：「自由に語ること」

—ニュッサのグレゴリオスにおけるその転換—

土 井 健 司

アテネの民主制の特徴を表現するものの一つに「パレーシア」(*παρρησία*)⁽¹⁾という言葉がある。元来その意味するところは、政治の場において自分の意見を臆することなく、率直に、自由に語ること、即ち「言論の自由」である。アテネの市民にとってこの自由を奪われることは非常に辛いことであつたらしく、次のような会話も残されている。⁽²⁾

イオカステ 祖国を追われるのはどんなことです。とても辛いことですか。

ポリュネイケス それはひどいもの、実際は口で言うより辛いことです。

イオカステ どんなふうにですか、追放の身に何がそのように辛いのですか。

ポリュネイケス 何よりもまず、自由にもものが言えぬことです (*οὐκ ἔχει παρρησίαν*)。

イオカステ 思うところを言えぬとは、それは奴隷と同じことですね。

追放され、「自由に語る」ことができなくなることは奴隷と同じと見なされている。奴隷や寄留者はこの権利を持っていなかったからである。このギリシャ語はアテネの民主制を経て、ギリシャ哲学、また『七十人訳』やフィロンやヨセフスに見られ、そうして新約聖書を通して古代キリスト教思想へと伝えられ、

パレーシア：「自由に語ること」

様々な連関で議論されることになった。特にキリスト教においてこの語は神に向かったの「祈り」との連関で論じられる。ローマのプリスキラのカタコンベにある「ドンナ・ヴェラタ」の図を見ると、古代教会において人々は手をまっすぐ左右に挙げ、天を仰いで祈りを捧げていたようである。それはどこか自由と率直さに満ちた祈りであって、今日のわれわれが普通に行う祈りとは随分と形態を異にしている。おもにわれわれは手を合わせ、下向きながら祈る。その姿勢は内に向かい、自らの罪深さに打ちひしがれている者のようである。印象をもとに言うなら、恩寵や自由といったものの自覚と自分の罪の自覚、こうした自覚の相違がそのまま祈りの姿勢となって現れている観がある。⁽³⁾ そしてこうした自由と率直さに満ちた祈りの態度は「パレーシア」という語の持っていた意味を視覚的に表現している。

本論文は、こうした「パレーシア」を四世紀の後半に活躍した教父ニュッサのグレゴリオスの中に探求して整理し、特に「モーセ」に関してフィロンとの比較を通してその問題点を指摘し、最後に一つの仮説を提示したい。その仮説とは、簡単に云うならば、グレゴリオスはこのパレーシアなる概念を彼以前の伝統、特にフィロンとは異なった仕方で捉え、これを排除しようとしたのではないか、というものである。少なくともグレゴリオスは、以前の伝統と比べるとこの概念に対して慎重である。こうした慎重さは「パレーシア」という言葉の持つ自由、解放といった面に対する懐疑に基づくのではないか。そしてこうした懐疑が彼にパレーシア論を展開することを控えさせ、後年のエペクタシス論へと繋がっていくのではないか。こうした議論をこの小論の中で展開したい。そこでわれわれはまずこの語についてギリシャの伝統から話を起こし、フィロンのパレーシア論を考察しよう。

1. ギリシャにおける用法⁽⁴⁾

元来「パレーシア」という言葉は「すべてを語る」($\pi\acute{\alpha}\varsigma\text{-}\rho\acute{\eta}\sigma\iota\varsigma$)という自由として、アテネの民主制の基本を表す言葉であった。奴隷や寄留者とは異なり、自由民は政治に参加し、思うところを自由に語る権利を有していた。こ

パレーシア：「自由に語ること」

のパレーシアをもって自由民の特徴となし、このパレーシアの欠如を奴隷の表徴としていたのが、先に挙げたエウリピデスの作品の一節であった。⁽⁵⁾ アテネ市民は特にこの「自由に語ること」、「自分の考えていることを自由に語ること」が自分たちの特権であると誇っていたようである。「パレーシア」という言葉こそ使われていないが、『ゴルギアス』の次の一節は有名である(461E)。

ポロス なんですか？ それならば、言いたいだけのことを言う自由が、ないということになるのですか。

ソクラテス いや、それはたしかに、君、君としてはひどい目を見ることになるだろうね、ギリシャの中でも一番言論の自由があるアテナイへやってきていながら、その土地において、君だけがひとりその恩恵にあずかれないとすればだよ。

その他演説家デモステネスは「率直な言論者」(διαλεγόμενος μετὰ παρρησίας)として人々を魅了したという。⁽⁶⁾ シュリアーは政治的パレーシアの特徴として三つをあげる。第一に「すべてを語る権利」(Rechtes, alles zu sagen)、第二はパレーシアにおいては物事の真実が語られるので「真実との密接な関係」(enge Beziehung zur Wahrheit)、第三に、独裁制などによる妨害に対抗する「率直さへの勇気」(Mut zur Offenheit: Freimut)という以上の三つの相である。⁽⁷⁾ また当然こうした民主主義の墮落という事態も見られ、その場合形式的には自由にものが言えても、実際はそうでなくなる。イソクラテスは「民主制はあるが、(現実には)パレーシアは存在しない」と嘆いている。⁽⁸⁾ プラトンは『国家』の中で民主制には自由、言論の自由(παρρησία)が存在するのは当然であるとしている。⁽⁹⁾

時代が変わり、奴隷にまでこのパレーシアが認められるようになると、それは自由民の特権ではなくなる。そうして政治的意味が後退して、個人的、倫理的意味に重点が移っていく。しかし既にソクラテスはこうした言論の自由の故に死を受け入れた。また『ゴルギアス』にも「魂が正しい生活を送っているか

パレーシア：「自由に語ること」

否かを、十分に吟味しようとするなら、人には三つのもの——つまり知識と、好意と、そしてパレーシアを備えていなければならない、とぼくは思うのだが…」と記されている。⁽¹⁰⁾ 更に友人関係における率直さを「パレーシア」で表すようになる。それは対等な者同士の率直な語らいを表す。『ニコマコス倫理学』の一節には次のように記されている。

親友仲間や兄弟に対してはというと、彼らに与えられるべきものは「パレーシア」とか「あらゆるものの共同」ということである。⁽¹¹⁾

あらゆることを共同で為し、互いに率直に語り合うこと、これが兄弟や友人との関係である。アリストテレスはこの他に「生まれの良さ」による「矜持」(*μεγαλοφυχία*)といった徳をパレーシアと関連づけている。⁽¹²⁾ つまり、身分卑しからぬ人間は卑屈になることなく堂々と「率直に語る者」であることができ、そうした人は矜持のある人である。また、とりわけキュニク学派はパレーシアを自由との連関で捉えたと言われる。⁽¹³⁾ 特にディオゲネスの言葉として伝わっている次の言葉はその典型であろう。

世の中で最もすばらしいものは何かと訊かれたとき、「何でも言えることだ(*παρρησία*)」と彼は答えた。⁽¹⁴⁾

「自由に思うところを語る」という伝統は、非難や悪口を容赦なく浴びせかけるといふ面も持ってはいたが、さまざまな意味を付与されながらも、アテネの民主制から哲学や倫理学における真理の探究、討論の自由、そして有徳の生などの意味へと至り、目立ちはないが、そうした営みの根底にあってそれらを支えてきたものの一つなのである。

2. アレキサンドレイアのフィロンにおける「パレーシア」の特徴

2-1 「神に対するパレーシア」

『七十人訳』にも「パレーシア」という語は見られる。⁽¹⁵⁾ しかしこの語は特定のヘブル語の訳語にはなっていない。ヘブル語には「パレーシア」に対応する言葉がないからである。ヘブル語の翻訳であれば、ヘブル語の意味を考慮する必要が出てくるが、パレーシアに関してはその心配は無用である。またキリスト教文献に見られる「パレーシア」のラテン語訳は *fiducia* が用いられるが、これも原意を伝えたものではなく、パレーシアとの相違がしばしば論じられる。⁽¹⁶⁾ 確かに「神に対するパレーシア」には神に対する「信頼」の意味が込められている。しかしそれはあくまでも「率直にすべてを語る」という原意に基づくのであって、このラテン語はこの面を表していない。この「パレーシア」という言葉は純粹にギリシャ起源の言葉であって、この点ギリシャ教父たちがこれをどのように理解したのかは、福音のギリシャ化という観点からも興味のある問題となろう。

さてフィロンのパレーシアの用法が古代ギリシャのそれと著しく異なっている点として一般に指摘されるのは、「神に対するパレーシア」が積極的、肯定的に論じられていることである。例えばイソクラテスにおいて「神に対するパレーシア」は、神に対する冒瀆として評価されていた。⁽¹⁷⁾ 神に向かって自由に思うところを述べることは、対等な者として神に語ることであり、神に不平を吐き、神を冒瀆する行為である。しかしフィロン、及びキリスト教において「神に対するパレーシア」は積極的にさまざまな文脈で論じられ⁽¹⁸⁾、更に神への「祈り」の文脈で論じられる。もちろんギリシャ世界においても神に対する祈りは見られる。この連関で述べるならば、マルクス・アウレリウスに次のような言葉が見い出される。

アテーナイ人たちの祈り。「雨を、雨を、おお恵み深きゼウスよ、アテーナイの人びとの野と畑の上に。」全然祈らないか、それともこういう風に

パレーシア：「自由に語ること」

単純に、率直に（ἐλευθέρως）祈るか、そのいずれかを取るべきである。⁽¹⁹⁾

また祈りを「神の友」との連関で述べる場合も見られる。⁽²⁰⁾ しかし不思議とこれを「パレーシア」なる語で表現する用例はまったく存在していない。ペテルソンやシュリアーもこの事実を強調する。⁽²¹⁾ 神の前に勇気を持って立ち、率直に語り、祈ること。ギリシャにはこれを「パレーシア」を使って述べるテキストはない。初期キリスト教ではこれを「主の祈り」と結びつける。とくに「父よ」という冒頭の言葉がパレーシアと関連して捉えられる。⁽²²⁾ こうした相違をペテルソンは神概念の相違に基づけていた。⁽²³⁾ つまりユダヤ教やキリスト教における神は人格的であって、自己啓示する神であり、友として人間に自己を打ち明ける神であるが、ギリシャ・ローマ世界の神々は表現上はともかくも、実際の所、こうした神ではない。従来の研究と共に、われわれはこの「神に対するパレーシア」をフィロンと彼以降の特徴とすることができる。⁽²⁴⁾

2-2 モーセのパレーシア

こうした「神に対するパレーシア」は誰でもがもっているわけではない。それは特にアブラハムやモーセといった特別な人物の能力である。特にフィロンには「神の友」としてモーセの「パレーシア」が論じられているテキストが見出せる。また神と人間との「主人——僕」関係においてパレーシアが使われている。この用法も特徴的である。パレーシアは、ギリシャにおいては「友——友」関係にのみ使われ、主人と奴隷との関係では決して使われない。ギリシャ人にとってパレーシアは対等な者間でしか成立しない。しかしフィロンには、神と人間との関係に限って、こうした用法を認められる。

モーセのパレーシアについては『神の相続人とは誰か』（*Quis rerum divinarum heres*）の4節から21節において集中的に論じられている。以下その議論を追い、フィロンのパレーシア論の概要をまとめ、ポイントを整理しよう。

神の偉大さや至高性の前に人は言葉を無くすほどの喜びに満たされ、舌がま

パレーシア：「自由に語ること」

わらなくなる。モーセの場合もそうであった（出エジプト記4章10節）。しかし「勇敢さ、及びより優れた者に対する適切な時期の率直さは驚くべき徳である。」ではどのようなときに僕（οἰκέτης: δούλος）は創造主なる主人に対して「率直」でありうるのか。それは「罪から清められ、その主人への愛が良心からのものであると判断されるとき」にである。このような場合に神の僕は、心に一点の曇りもなく神に対して「自由に語る」（ἐλευθεροστομεῖν）ことができる、但し「語る」よりも、「聴く」ことがふさわしい者もいる。ここで「黙して、聞け」という聖句（申命記17章9節）の説明がなされ、「愚か者」（ἄμαθής）は聴くべきであるとされる。しかし知恵を求め、主人を愛する者には（τοις ἐπιστήμης ἐφιέμενοις καὶ ἅμα φιλοδεσποτοῖς）「パレーシア」が必要であると述べられて、再びパレーシアへと論述が移る。今後は知恵の探究として、パレーシアが捉えられる。モーセは主に向かって様々な問いを投げかけ、答えを求める。これが神に対するパレーシアとして説明される。⁽²⁵⁾ 「モーセは語り、主は彼に声を挙げて答えられた（出エジプト記19章19節）、と記されているからである。」フィロンはこの知恵の探究としての連続性を、この聖句の動詞の未完了（ἐλάλει: ἀπεκρίνετο）という時制の内に読み込む。

更にフィロンはそれに留まらず、神に対する非難の抗議を聖書から引用する（出エジプト記5章22節、23節、32章32節、民数記11章12節、13節、22節）。ここではエジプト脱出を挙げるモーセが、民に答えようとして神に対して様々な不満と抗議の声を挙げている。フィロンはこれらをすべて「パレーシア」として捉えている。そしてフィロンによると、モーセが勇敢にもこうした言葉を言えるまでに到っているのは、彼が「神の友」だからである。知者は「神の友」である。そして「パレーシアは友愛と同種である。」（παρησιία δὲ φιλίας συγγενές）「というのもある人が誰かに率直に語るのは、自らの友に対してだけである。」従って「神の友」であるので、モーセは敢えて神に対してこうしたことを語る勇気を持っていたのだ、と解釈される。

ここでは聖書における神に対するモーセの言葉が積極的に取り上げられて、

パレーシア：「自由に語ること」

これらが「パレーシア」として解釈されている。モーセのパレーシアは三つの局面で捉えられていた。整理しよう。第一は僕が主人に対して率直に語る事ができるのは、罪から清められ、その良心に発した主人への愛がある時である。主人への純粋な愛から僕は、主人に対して率直に語る事ができる。忠義の心から出る言葉の意味であろう。清らかさ、良心との連関、主人への愛といったことがここでのポイントである。またここから「無恥」としてのパレーシアも導出される。第二は知恵の探求であった。知恵を探求する者は、問いかけをなし、答えを得る。こうした問いかけが、パレーシアとして捉えられており、その連続性が強調されていた。そして第三は神への抗議が、「知者」「神の友」としてのモーセによって可能であったということであった。イソクラテスにおいて、また純粋にギリシャ的な世界においてこのような「神へのパレーシア」は冒瀆行為として捉えられている。しかしフィロンは聖書に見られるモーセの神に対する物言いを取り上げ、これを積極的に「パレーシア」と解釈する。友人関係をパレーシアで表現することはギリシャ世界において一般的な用法であった。しかしフィロンはこれを「神——人」関係に適用する。フィロンがこれを「パレーシア」としたこと、そしてこれを「勇敢さ」「神の友」との連関で解釈したことは注目に値する。但しここでは第一の「僕」という視点は消えている。何故「僕」であり、「友」であるのかは説明されないままである。恐らくこの矛盾がそのまま残され、グレゴリオスにおける「パレーシア」の転換になるのではないだろうか。キリスト者は神の「友」か、「僕」なのか。とまれ、これはまだ先の議論である。

3. グレゴリオスにおけるパレーシアとその問題性

3-1 グレゴリオスのパレーシア論の概要

『ギリシャ語宝典』(Thesaurus Linguae Graecae)を引いてみると、グレゴリオスの著作の中にこの「パレーシア」、及び関連語は合計76回使用されていることが分かる。グレゴリオスのパレーシア論は様々な研究者が言及するが、特に論争の対象となる言葉ではなく、解釈に困難なものはない。詳しくは

パレーシア：「自由に語ること」

ダニエルーなどの論述に譲り⁽²⁶⁾、われわれは彼のパレーシア論の要点のみを指摘するにとどめよう。

グレゴリオスのパレーシア論において「神に対するパレーシア」をまとめると、そこには主に二つの局面がある。第一は失われた原初の「神の似像」の特徴であり、また終末論的希望の対象という面である。⁽²⁷⁾ 原初において人間は恥を知らず、神の前で「パレーシア」を有していた。そしてグレゴリオスによると、この「パレーシア」の回復こそ「救済」の希望の一つである。預言者をはじめ多くの人々がこれを求めたこと等が述べられている。第二はそうしたパレーシアと地上での生との関係である。こうしたパレーシアの獲得のためには、まず自らの生を整え、備えなければならない。例えば神認識との関連で次のように言われる。

われわれは自らの生をそのような率直さにふさわしいものと為す以前に、先に神についての思惟を大胆にも得ようと務めてはならない。⁽²⁸⁾

特に「主の祈り」において冒頭の「父よ」呼びかけについて、こうした「父よ」という呼びかけが可能であるためには、祈る者が「子」としてふさわしくなければならないと述べられる。それは父なる神の「子」としての生であり、そうした生を生きてはじめて「父よ」と呼びかけることができる、と述べられる。

というのも真理はわれわれを欺いて教え、われわれがそうでないようなものを語り、われわれが生まれついていないものの名を付けるようなことはせず、不滅で、義しく、善なるものを自分たちの父と語る者たちが、生においてその血縁性を証示するようにわれわれに教える。あなたは、どのような、またどれほどの熱心が必要なのか分かりますか。かくしてこのことのためにわれわれの良心が高められて、そのパレーシアの基になるものが先行し、そうして神に向かって敢えて「父よ」と語るのです。⁽²⁹⁾

パレーシア：「自由に語ること」

またこの祈りの様々な連関でパレーシアは使われる。更に「真理」、「良心」、「勇敢さ」、「輝き」などとの連関でこのパレーシアは語られ、論じられている。しかし「神の友」との連関では使われていない。またフィロンにおいて見たように、パレーシアは特定の人物に適用されている。グレゴリオスがパレーシアと共に言及する人物は、アブラハム、モーセ、ダビデ、エリア、また洗礼者ヨハネ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、そしてステパノス、更にグレゴリオス自身の姉マクリナである。⁽³⁰⁾ 洗礼者ヨハネやステパノスは、それぞれヘロデやイスラエル人に向かってはっきり、率直にものを言う典型として引用されている。これらは総じてグレゴリオス独自の用法と言うよりも、従来の伝統の延長上に位置している。

3-2 「神の友」とパレーシアの連関の不在

ところで、ダニエルーはグレゴリオスのパレーシア論を「神の友」と関連付けて論じている。⁽³¹⁾ 当該箇所におけるダニエルーの議論は次のような構成になっている。

自由としてのパレーシアは奴隷状態と対立するが、それには二つの相がある。第一は「情念の奴隷」に対してである。その場合パレーシアは恥に対比され、アパティアと関連する。第二は「神の僕」に対してである。神と被造物の関係を「主——僕」の関係から捉えることは、旧約に見られる「創る神」と「創られた人」との自然な関係を表す。しかしそれは新約がもたらした新しい超自然的関係を表していない。ヨハネ伝15章15節に見られるように、イエスのもたらした新しい関係は「主——僕」の関係ではなく、「友——友」の関係である。それは恐怖に基づく上下関係ではなく、友愛による関係である。ここでグレゴリオスの『モーセの生涯』結論部(44, 430B-C: = II 320)から引用がなされ、「恐怖」と「友」の問題がグレゴリオスのテキストの中に確認される。そしてフィロンを挙げて「神の友」とパレーシアの連関を論証し、同様の連関がグレゴリオスのテキストにも見出されることを示唆した後、一つのテキストを引用し、「神の友」とパレーシアの連関をグレゴリオスのテキストの中に基礎づけ

る。

ダニエルーの論述は巧みではあるが、いささか速度が速い。ヨハネ伝、フィロン、グレゴリオス等を竜巻にでも巻き込むように一括してまとめて、一元的に論じていることに対してわれわれは慎重にならなければならない。ヨハネ伝はフィロンとは違ふし、またグレゴリオスもフィロンではない。同じように見えても、慎重に考察し、微妙な違いにこだわりつつ、フィロンやグレゴリオスそれぞれの思想の特徴を取り出すように務めなければならない。

さてこうして注意深くダニエルーの議論を再検討してみると、奇妙なことに気がつく。それは、第一に奴隷と友人の対立に言及した『モーセの生涯』の結論部には「パレーシア」への言及がないこと、さらにここでダニエルーが「神の友」とパレーシアの連関の論拠として挙げているグレゴリオスのテキストが唯の一つしかなく、しかもそのテキストはこの連関を論証するのに適切なテキストとは思えないことである。引用してみよう。

というのも彼ら（＝ペテロ、ヤコブ、ヨハネ）⁽³²⁾ だけは、常に主とともに学び、他の使徒達と比べると幾分特別の地位をもち、また人間的友愛が更に増し加わることに従ってではなく、神の真理の確証に従ってパレーシアを有していた。⁽³³⁾

よく見てみると、このテキストは人間的友愛を否定しているテキストである。ここでは「人間的友愛が更に増し加わることに従ってではなく」と述べられ、「友」ということが否定されている。どうしてダニエルーはこのテキストを挙げるのだろうか。恐らくダニエルーはこのテキストを挙げざるを得なかったものと思われる。というのは、この箇所以外には、パレーシアと友愛、または「神の友」との関係に言及しているテキストが全くないからである。確かに先に考察したように、フィロンにはこの「神の友——パレーシア」の連関は見出せる。しかし残念ながら、グレゴリオスのテキストの中にこの連関を示唆するテキストはない。特に注目すべきことは、『モーセの生涯』の中で「神の友」が語ら

パレーシア：「自由に語ること」

れていた箇所において「パレーシア」という語は使われていないし、そもそもこの『モーセの生涯』という著作自体の中にパレーシアという語は一度も用いられていない。⁽³⁴⁾ またモーセとパレーシアの連関を述べているテキストは一つだけ見出されるが、それは「神の友」に言及しないし、特にモーセを主題としてはいない。「パレーシア」、「神の友」そして「モーセ」の三者が一つに論じられている箇所は、グレゴリオスの中には残念ながら存在しない。「神の友」とモーセの関連はしばしば言及される。しかし「神の友」とパレーシアの連関を告げるテキストは皆無である。何故この連関でパレーシアは見出せないのか。それはただ「ない」だけでなく、グレゴリオスによるパレーシアの「排除」ではないだろうか。グレゴリオスは意図的にモーセが「神の友」であるということを「パレーシア」との連関で解釈しないのではないか。そしてこの排除は神学思想的に彼のエペクタシス論へと繋がっているのではないだろうか。しかし以上の議論はまだ単なる印象の段階にとどまる。更にわれわれはこの点を別のテキストを基に考察してみよう。

3-3 「友」と「勇敢さ」、そして「顔」の否定

われわれは、モーセのパレーシアを彼が排除しようとしていることをいくつかの重要なテキスト、即ちエペクタシス論のテキストから確認してみよう。これらのテキストは『モーセの生涯』と『雅歌講話』に見られ、そこでは「友」と「勇敢さ」が否定されている。これらの語はいずれもフィロンにおいて、モーセのパレーシアとの連関で言及されていた。しかしグレゴリオスはこれらをエペクタシス論の文脈で否定する。その際「神の顔」が否定されている点にその要点を見出すことができる。

これらの神顕現において「顔と顔を合わせて」とか「自分の友と語るように」と述べられて、聖書の言葉によりはっきりと神をはっきりと見ると証言されている者（モーセ）が、こうした境地に到り、聖書の証言によって達していると信じられている所にいないかのように、神に対して、常に現

パレーシア：「自由に語ること」

れている者（＝神）が見られていないかのように、彼（＝モーセ）に現れてくれることをどうして求めるのか。⁽³⁵⁾

この一文は『モーセの生涯』にあってエペクタシス論が展開されるきっかけとなっている文章である。つまりグレゴリオスのエペクタシス論は、モーセについては、彼が顔と顔を合わせて神と語った体験、また友と語るように神と語り合ったという体験自体をモーセ自身が乗り越え、更に神を求めたという事にその根拠を見出す。その意味で「神の友」とは究極の段階ではない。更にグレゴリオスにおいてはそもそも究極の「状態」というもの自体が否定される。それは「神の顔」を見るという「大胆な（勇敢な）」願望の否定に繋がる。そもそも「神の顔」を見るということ自体がありえないことである。それは人間の能力の問題ではない。従って次のように述べられる。

そして大胆で願望の限界を越えた要求はこのこと、すなわち何か鏡や反射を通してではなく、顔において美を享受することを望む。神の声は、短い言葉で思惟の計りがたい深みを示し、拒否されたものによって要求されたものを与える。というのも神の寛厚は彼に願望の充足を与えることを認めるが、他方その切望の停止や満足を約束しない。⁽³⁶⁾

「顔において」神の美を見ること、このモーセの願いは聞き入れられないことによって聞き入れられる。ここでグレゴリオスが考えていることこそエペクタシス論である。それは「神の顔」を見ることではないが、真に神を見ることである。⁽³⁷⁾「真に神を見る」ことは、「神の顔」を見ることではなく、神に「従う」ことであり、「神の背」を見ることである。⁽³⁸⁾ こうしてグレゴリオスは「神の顔」を否定し、「友」と「勇敢さ」を乗り越える。同様のことは『雅歌講話』においても確認できる。

そして、彼の登頂のすべて、多彩な神顕現のすべてをどうやって言葉で語

パレーシア：「自由に語ること」

り尽くすというのか。しかし同様にまた、かような、またかくのごときものがこれほどの境地にいたり、それらによって神へと高められたのであるが、それでも更に多くのものへと飽くことなく願望を持ち、また聖書がまさに顔を合わせて語るにふさわしいと証言しているのに、神と顔を合わせて見ることを望む者となる。しかし同様にまた、友が友と向かい合って語ることも、彼に生じた神との口と口での会話より高いものへの願望から彼を止めることはなかった。⁽³⁹⁾

先に確認したように、『モーセの生涯』にはパレーシアは使われていない。また『雅歌講話』には五ヶ所で使われている。⁽⁴⁰⁾ しかしグレゴリオスの根本的な思想と見なされるエペクタシス論との比較で見れば、『雅歌講話』におけるパレーシアの用例はどれも重要なものとは言えない。それは従来の伝統的用法に基づいたものであり、グレゴリオス独自の思想を表している箇所ではないと考えられる。それに対して今挙げたテキストは、いずれもエペクタシス論が展開されている重要なテキストであった。これら三つのテキストに共通していることは「神の顔」の否定である。「友と友が語るように」と言われるのは、面と向かい合って、「顔」を正視するように「語り」、「見る」からである。しかしグレゴリオスがこうした聖書のテキストを引用するのは、これらが終極点ではなく、モーセはこうしたことを体験したにもかかわらず、更に更に神を求めたのだ、ということを示明するためである。更にこうした「顔」を求めることは「大胆な」、つまり「勇敢な」願望である。神の顔を見ようと求めることは、被造物としては分を超えた大胆な願望であろう。しかしこの願望は満たされないことによって満たされる、と言われる。「満たされない」とは結局「神の顔」は見ることができないからである。それは被造物の能力の問題ではなく、「顔を見る」という事柄自体の否定である。そして「満たされる」というのは別の仕方で神を見ることができからであり、しかもその方が真の神認識であるからである。従ってここでは「顔」が徹底的に、根本的に否定される。代わって提示されることは「神の背面」である。先の『雅歌講話』のテキストは次の

パレーシア：「自由に語ること」

ように続く。

神の顔の感想は、後ろから御言葉に従うことによって成し遂げられる、神に向かった止まることのない歩みである。⁽⁴¹⁾

ここでグレゴリオスははっきりと「神の顔」から「神の背中」への転換を語っている。「神の顔」を見ることは、願望の停止であり、神への欲求が止まることになる。『雅歌講話』と『モーセの生涯』でグレゴリオスは「顔」ではなく「背中」を、「前面」ではなく「背面」を強調し、これによってエペクタシス論を展開する。しかしパレーシアの原意は、面と向かって相手に対して率直に語ることである。⁽⁴²⁾ ここでグレゴリオスはパレーシアという言葉を示して否定していない。しかし「友」、「顔」そして「勇敢さ」の否定はパレーシアの「否定」にまではいたらないとしても、その「排除」を意図しているのではないのだろうか。それは彼独自の思想であるエペクタシス論とは相容れないからである。

「パレーシア」という言葉はどれほど神学化されていようとも、「面前ではっきりとものを言う」という意味をぬぐえない。ラテン語訳の *fiducia* はこの意味を伝えていないので問題は起こらない。しかしギリシャ語の「パレーシア」にはその原意が付きまとう。恐らくグレゴリオスはパレーシアにこうした危険を感じたのではないだろうか。⁽⁴³⁾ グレゴリオスはこの意味を十分知っており、事実グレゴリオスがパレーシアを使う用例には、そのようなものがある。⁽⁴⁴⁾ これに対してグレゴリオスがエペクタシス論で強調することは、「神に従う」ことである。それは「神の僕」であって、「神の友」、本来の意味で対等な「友人」ではない。『モーセの生涯』の結論部分では「神の僕」と「神の友」の二つが議論の対象となっている。そこではまず「神の僕」の議論が行われ、最後に「神の友」に言及される。しかしここに至るまでエペクタシス論が展開され、「神の僕」が主題として論じられてきたことを考えると、そこでの「神の友」の言及は唐突であり、作為的な付加という印象が否めない。更にそこで「神の

パレーシア：「自由に語ること」

友」とは神に「知られている」という意味に限って述べられている。それは「知る——知られる」、つまり「知り合い」という意味での関係性を表し、字義通り対等な「友人」までも意味するには到っていない。こうした仕方でグレゴリオスは、神と人間との関係性へと意味を転じて「神の友」という表現を和らげ、代わって「神の僕」として「神に従うこと」、彼のエペクタシス論を展開するのである。

4. 結 論

これまでの論述を通して、われわれは一つの仮説を提示した。これを「仮説」と表現せざるを得ないのは、本論の主張がいわば「状況証拠」に基づくからである。こうした仮説を裏付ける言葉はグレゴリオスには見出されないし、そもそも彼が言葉で直接にこれを表現するとは思えない。それは彼の裏側の意図である。しかしこのように理解することで、グレゴリオスのテキストの幾つかの箇所がより明瞭に理解できるようになる。

フィロンは「神に対するパレーシア」を積極的に取り上げ、「神の友」と「勇敢さ」と共にモーセを解釈していた。グレゴリオスはエペクタシス論を展開するためにこうしたモーセの「パレーシア」を排除する。「パレーシア」という言葉自体は、グレゴリオス以前のキリスト教において定着していた言葉であり⁽⁴⁵⁾、これをはっきりと「否定」することはできない。しかし「否定」はできなくとも、「排除」しようとしたのではないか。エペクタシス論が十分に展開されている『モーセの生涯』や『雅歌講話』といった後期の作品を見る限り、このように考えざるを得ない。彼のエペクタシス論は「神の顔」から「神の背面」への転換である。この転換は根本的であり、この線上において彼はモーセを解釈する。その際「パレーシア」という言葉はエペクタシス論に対立する。彼は「友」、「勇敢さ」といった言葉を使用し、これらを否定することで暗にパレーシア批判を展開したのではないだろうか。想像力を働かせるならば、これには当時の教会の事情、即ち教会の体制化や修道制の確立が影響しているとも考えられる。国教化したキリスト教の組織にとって「自由に語る」ことは危

パレーシア：「自由に語ること」

険だからである。モーセのような人物の「自由な語り」はここで人々の模範にはならない。しかしこれは本論の議論を超えている。いずれにせよ、フィロンとは異なって、グレゴリオスはモーセについてその「パレーシア」を巧みに排除しながら、「神に従う」という彼独自のエペクタシス論を展開していくのである。

*なお本論文は文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

パレーシア：「自由に語ること」

【注】

- (1) 「パレーシア」という言葉は日本語に訳すのは難しい。Liddel and Scott and Johnes, Greek-English Lexicon には次のような訳語が記されている。①frankness, freedom of speech, ②in bad sense, licence of tongue, ③freedom of action, ④liberality, lavishness. それは「率直さ」「自由に語ること」、また「権利」、そして「厚かましさ」「図々しさ」等を表す。本論では概ね「パレーシア」と表記する。
- (2) エウリピデス 『フェニキアの女たち』387～392行 岡道男訳 世界古典文学全集9 筑摩書房 1965年
- (3) 「さて身体の姿勢は無数にあります、手を伸ばし、目をあげた姿勢は〔他の〕すべての〔姿勢〕よりも好ましいものであることを疑ってはなりません。……また跪くのは、自分の諸々の罪に対するいやしとゆるしを懇願しつつ、自分の諸々の罪を神のみ前に申し述べるときに取らなければならない姿勢であり、……。」Origenes, De orat., GCS2, 396, 10ff 小高毅訳（『祈りについて・殉教の勧め』創文社 1985年 150頁）
- (4) 今日でもこの言葉についての基本的文献はペテルセンのものであろう。E.Peterson, Zur Bedeutungsgeschichte von *παρρησία*, in: Zur Theorie des Christentums. Festschrift für Reinhold Seeberg 1 Leipzig, 1929, S 283-297. その他には次のものが挙げられる。H.Schlier, Art. *παρρησία, παρρησιάζομαι*, in: ThWNT 5, 1954, S869-884; H.Jaeger, *Παρρησία et Fiducia*, in: Stud. Patr.1=TU63(1957), p221-239. この他未見ではあるが、J.M.Bartelink, Quelques observations sur PARRHSIA dans la littérature paléo-chrétienne, Graecitas et Latinitas Christianorum primaeva. Supplementa. Studia ad sermonem Christianum pertinentia (Nijmegen) 3, 1970 もある。
- (5) プルタルコスはこの箇所を批判して、「心にあることが話せないのは何も奴隷に限ることではなくて、分別のある人なら事と次第によって言葉を控えるわけだし、……」と述べている（De exilio, 606; 河野与一訳『プル

パレーシア：「自由に語ること」

トーク倫理論集の話』岩波書店 1964年 471頁)。この批判は、パレーシアの政治的意義が薄れ、倫理的意味に重点が移った時代だからであろう。

- (6) Plutarchos, Demosthenes, c12; c14.
- (7) H.Schlier, *παρρησία*, S 870f.
- (8) *Περὶ εἰρήνης*, 14.
- (9) 8, 557b.
- (10) Gorg. 487 A. 加来彰俊訳（岩波文庫 1967年）を一部訂正。
- (11) NE, 9, 2, 1165a29.
- (12) NE, 4, 8, 1124b29.
- (13) J.Bernays, *Lukian und die Kyniker*, 1898, S101f.
- (14) Diog. Laert. 6, 2, 69. 加来彰俊訳（岩波文庫 1989年）。
- (15) 合計17回使用されている（Lev. 26,13; Esther 8,12; Job. 22, 26; 27, 10; Ps. 11,6; 93,1; Prov. 1,20; 10,10; 13,5; 20,9; Sap. 5.1; Eccl. 6,11; 25, 25; Mach. 4,1; 18; 7,12; 10,5）。これらに共通した一つの意味というものは認めがたい。また「自由に語ること」であれば、例えば神に対するヨブの挑発的物言いは「パレーシア」の用例として期待されるが、そのような意味で使われることはない。
- (16) Peterson, *Zur Bedeutungsgeschichte von παρρησία*, S297; Jaeger, *Παρρησία et Fiducia*, p234.
- (17) Or. 11, 40.
- (18) 新約聖書では特に第一ヨハネ書 2章28節、3章21節、4章17節、5章14節が挙げられる。
- (19) *Εἰς ἑαυτὸν*, 5, 7. 神谷美恵子訳（岩波文庫 1956年）。
- (20) Epict. Diss., 2, 17, 29.
- (21) Peterson, *Zur Bedeutungsgeschichte von παρρησία*, S290; Schlier, *Art. παρρησία, παρρησιάζομαι*, S874.
- (22) Origenes, *De orat.*, 14,2, (GCS 2, 331, 7) :14,5, (GCS2, 332, 20): 22, 1 (GCS 2, 346, 18) を参照。今日でもカトリック教会のラテン語で行われ

パレーシア：「自由に語ること」

るミサの中で、主の祈りを唱える前に *audemus dicere* という伝統が残っている。

- (23) Peterson, Zur Bedeutungsgeschichte von *παρρησία*, S291.
- (24) 他に例えば Josephus, *Antiquit. Jud.*, 2,52; 5,38 等も参照。
- (25) 同様の理解はオリゲネスにも見られる (PArch. 3,1,22)。恐らくオリゲネスはフィロンのこの箇所を参考に議論を展開しているであろう。
- (26) J.Daniélou, *Platonisme et Théologie mystique*, *Théologie* 2, Paris: Aubier, 1944, p 103–115. 但し ジョリー (R.Joly, *Sur deux thèmes mystiques de Grégoire de Nysse*, *Byzantion* 36 (1996) p127–143) は、逐一ダニエルーを批判して、如何にグレゴリオスのパレーシア論がエピクテトスの『人生談義』3,22に見られるキュニク学派の影響を受けているかを論じている。しかしこれはあまり生産的な議論とは思えない。ガイスは樂園における原初の神の像の特徴の一つとして論じている (J.Gaïth, *La conception de la liberté chez Grégoire de Nysse*, Paris: Librairie philosophique J.Vrin, 1953, p65)。またダニエルーはパレーシアを「光」という第一段階の最後に位置づけているのに対して、フェルカーは完全性の特徴の一つと解釈している (W.Völker, *Gregor von Nyssa als Mystiker*, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GMBH, 1955, S237f)。先に挙げた Peterson と Jaeger、及び Schlier の研究は『主の祈り講話』をもとに少しグレゴリオスに言及するにとどまる。
- (27) *De orat. Dom.*, or. 5, GNO8/2, p60; *De an. et res.*, PG 46 101C; *In inscr. Ps.*, II, 14, GNO5, p151; *In Eccl. or.* 6, GNO5, p386; *Or cath.*, PG46 29B; *In diem lum.* GNP9, p222.
- (28) *In inscr. Ps.* II, 3, GNO5, p76.
- (29) *Or. Dom.*, or. 2, GNO7/2, p25, 12–19.
- (30) ダビデについて (*In inscr. Ps.* II, 3, GNO5, p77f)、エリアについて (*In Cant. or.* 15, GNO6, p454)。アブラハム、モーセ等の預言者 (*De iis qui bapt.* PG46 428B)。洗礼者ヨハネについて (*In laud. fr. Basil.*,

パレーシア：「自由に語ること」

PG46 801D-804C)。ペテロ、ヤコブ、ヨハネについて (In Alter Laudatio St. Stephani, PG46 732A)。ステパノスについて (In laud. St. Stephani, PG46 712D; In Altera Laudatio St. Stephani, PG46 724B; 725A)。そしてマクリナについて (Ep.19, GEO8/1, p64)。

- (31) Daniélou, *Platonisme et théologie mystique*, p109-111. 次の論文も参照。今道友信「転位と塑性に関する一研究」中世思想研究4, 1961, 15~31頁。今道氏は「勇敢」という徳の問題としてグレゴリオスのパレーシアを取り上げて論じ、また「神の友」に言及する。しかし氏の主張はフィロンにこそ当てはまるのではないかと思う。少なくともそこでフィロンに対する言及がないのは残念である。
- (32) ダニエルーはここでの「彼ら」として「ペテロ」と「ヨハネ」のみを指示し、「ヤコブ」には触れていない (p111)。こうした小さなミスからもダニエルーの勇み足を伺い知ることができる。
- (33) Altra Laudatio S.Stephani, PG46 732A.

Οὗτοι γὰρ μόνοι τῷ Κυρίῳ πάντοτε συσκολάζοντες, καὶ ἐξάαιρετον ὡσπερ παρὰ τοὺς λοιποὺς τῶν ἀποστόλων χώραν ἔχοντες, καὶ παρρησίαν, οὐ κατὰ τὴν τῆς ἀνθρωπίνης φιλίας προσληψιν, ἀλλὰ κατὰ θεϊκὴν ἀληθείας ἐπίκρισιν.

- (34) De iis qui bapt., PG 45, 428C. ここではアブラハム、モーセ、エリヤといった預言者が、天の国の栄誉である「パレーシア」のために自らの生命の危険をも省みなかったということが述べられている。

- (35) De Vita Moysis, II 219.

Πῶς ὁ τοσαύταις θεοφανείαις ἐναργῶς ὁρᾶν τὸν Θεὸν παρὰ τῆς θείας φωνῆς μαρτυρούμενος ἐν οἷς φησιν ὅτι ἐνώπιος ἐνώπιω, ὡς ἂν τις λαλήσῃ πρὸς τὸν ἐαυτοῦ φίλον, ἐν τούτοις γενόμενος ὡς μήπω τυχῶν ὧν τετυχηκέναι διὰ τῆς γραφικῆς μαρτυρίας πιστεύεται,

パレーシア：「自由に語ること」

δειται τοῦ Θεοῦ φανῆναι αὐτῷ, ὡς τοῦ ἀεὶ φαινομένου μηδέπω ὀφθέντος;

(36) De Vita Moysis, II 232.

Καὶ τοῦτο βούλεται ἡ τολμηρά τε καὶ παριούσα τοὺς ὄρους τῆς ἐπιθυμίας αἴτησις τὸ μὴ διὰ κατόπτρων τινῶν καὶ ἐμφάσεων ἀλλὰ κατὰ πρόσωπον ἀπολαῦσαι τοῦ κάλλους Ἡ δὲ θεία φωνὴ δίδωσι τὸ αἴτηθὲν δι' ὧν ἀπαναίνεται, ἐν ὀλίγοις τοῖς ῥήμασιν ἀμέτρητόν τινα βυθὸν νοημάτων παραδεικνύουσα. Τὸ μὲν γὰρ πληρῶσαι τὴν ἐπιθυμίαν αὐτῷ ἢ τοῦ Θεοῦ μεγαλοδωρεὰ κατένευσε, στάσιν δὲ τινα τοῦ πόθου καὶ κόρον οὐκ ἐπηγγείλατο.

(37) この点については拙論（「エペクタシス——ニュッサのグレゴリオスにおける「無限」の問題」哲学研究 第560号 1994年10月 28～69頁）、あるいは筆者の博士論文（『神認識とエペクタシス——ニュッサのグレゴリオスによるキリスト教的認識論の形成』）〔1995年3月京都大学文学部受理〕第四章を参照。

(38) De Vita Moysis, II 252.

(39) In Cant. or 12, GNO6 p355–356.

καὶ πῶς ἂν τις πάσας αὐτοῦ τὰς ἀναβάσεις καὶ τὰς ποικίλας θεοφανείας διεξέλθοι τῷ λόγῳ; ἀλλ' ὅμως ὁ τοσοῦτος, ὁ τοιοῦτος, ὁ ἐν τοσοῦτοις γενόμενος καὶ διὰ τοσοῦτων πρὸς τὸν θεὸν ὑψωθείς ἔτι ἀπλήστως τῆς ἐπιθυμίας ἔχει τοῦ πλείονος καὶ τοῦ κατὰ πρόσωπον ἰδεῖν τὸν θεὸν ἰκέτης γίνεται καὶ τοῦ μαρτυρήσαντος ἤδη τοῦ λόγου τῆς κατὰ πρόσωπον αὐτὸν ὁμιλίας ἤξιωσθαι. ἀλλ', ὅμως οὔτε τὸ ὡς φίλον φίλῳ προσδιαλέγεσθαι οὔτε ἢ στόμα κατὰ στόμα γινομένη αὐτῷ πρὸς τὸν θεὸν

パレーシア：「自由に語ること」

ὁμιλία τῆς τῶν ἀνωτέρων αὐτὸν ἐπιθυμίας ἴστησιν, ἀλλ' Ἐὶ εὕρηκα χάριν, φησὶν, ἐνώπιόν σου, ἐμφάνισόν μοι σεαυτὸν γνωστῶς.

- (40) エフェソ書 3 章10節12節を引用する箇所 (or. 8, GNO6, p255, 3) を除けば、次の箇所でパレーシアは見出せる。Or.10, p303, 4; or. 11, p317, 13; or. 12, p369, 11; or. 15, p454, 1. これらはそれぞれ興味深い内容のテキストであるが、エペクタシス論を展開するものではない。特に第12講話の用例では、パレーシアに言及した直後に「別の意味がある」と述べられ、エペクタシス論が展開されている。少なくともこのことは、パレーシアがエペクタシス論とは異なったものであるとグレゴリオスが考え、感じていた証である。
- (41) καὶ ἡ τοῦ προσώπου αὐτοῦ θεωρία ἐστὶν ἡ ἄπαυστος πρὸς αὐτὸν πορεία διὰ τοῦ κατόπιν ἔπεσθαι τῷ λόγῳ κατορθουμένη.
- (42) In inscr. Ps., II, 14, p 151, 4 では「神の顔」とパレーシアの連関が、墮落から回復された人間は神の「顔」の前に立ち「パレーシア」を取り戻す、と語られている。また「パレーシアの内に神の顔を見る」(De virg. 12, 4, 6, SC 119, p418)、更に「顔を合わせた神の顕現を喜ぶのでパレーシアに満ち」(Or. Cath., 6, PG45 29B) といった表現が見られる。
- (43) これを示唆するテキストが一例ある。グレゴリオスは『主の祈り講話』の中でパレーシアへの戒めを行っている。主の祈りの一節「我々の罪を赦してください」に対して、自分たちは罪を犯していないと主張する人間を戒めて言う。

即ち、たとえ人間的過ちから最大限離れていようとも、清い良心をもとに「大胆率直に語ってはならない。」(μηδαμῶς παρρησιάξ-εσθαι)

(or. 5, GNO7/2, p 63)

- (44) 一例を挙げると次の箇所がある。C.usurar. GNO9, P201, 28. ここでは

パレーシア：「自由に語ること」

偽善の金持ちの施しに対して貧しい者が「健全なるパレーシア」によって、この金持ちに対して「兄弟の涙から私に食を与えるな。仲間の貧しい者たちの溜息からできたパンを貧しい者に与えるな」と語るだろうと述べられている。こうしたパレーシアは日常的用法である。

- (45) 数字の上のことであるが、TLGを引いてみると、キリスト教著作家の用例が圧倒的に多い。プルタルコスの223例とルキアノスの111例を除くと、百例を超えるものはすべてキリスト教著作作家に限られる。ここでもヨハネス・クリュソストモスは目立っており、1465例を数える。こうした数の上からも、この言葉がキリスト教において定着していることが推察される。